

イタリアの労資関係と諸政党について の覚えがき (3)

——イタリア共産党の組織の推移1921～1943——

河 野 穰

(1)

1921年1月のイタリア社会党第17回大会で純粹共産主義派が分離してイタリア共産党を結成したことはすでに他のところでのべた⁽¹⁾。この大会で共産主義派の決議がえた得票数は58,000票であり、おなじ月の27日、43,000人を組しきしていた社会主義青年同盟の大会では35,000票がイタリア共産党とブロックをくむ方向に賛せいた。社会主義青年同盟の加盟人員は1918年の6,500人から19年には35,000人へと急増し、20年には55,313人へとさらに増大していた。青年たちはイタリア社会党の最左派にいちし、活動家、幹部のなかには、そのごイタリア共産党の歴史をさまざまにいろどるL.ロンゴ、G.ベルティ、P.セッキア、G.ドッザ、M.スコッチマルロ、P.トレッソ、P.ラヴァッツォーリらの名がみえる。この勢力を基そにして設立されたばかりのイタリア共産党は43,000人の党員を有することになった。イタリア共産党はもっぱら勤労者の党として成立しており、党員の98%を勤労者がしめ、知識人は0.5%をしめるにすぎなかった。リヴォルノの分裂で純粹共産主義派がかくときした3分の1という数字は、ジノヴィエフがコミンテルンの執行委員会につたえた「ボンパッチ、ボルディガ、テルラチーニに指導された共産主義者は《党の70～90%をかくときする》」⁽²⁾という判だんとはいちじるしく相違していたことは事実である。国会議員、市長、労働組合、

イタリアの労資関係と諸政党についての覚えがき (3)

COOP 下部組しきなどで社会党の傘下から共産党の傘下にうつったものもごくすくなかったといってよい。リヴォルノ大会時点での労働組合内での共産党と社会党の力関係は、カーメラ・デル・ラヴォーロで288,000対556,000、産業別・職業別組合で136,000対798,000であったが、カーメラ・デル・ラヴォーロで共産党の指導下にはいったものはリヴォルノ、サレルノ、トリエステ、ターラントの組織のみである。156名の下院議員中共産党にうつったものは16名、共産党にうつった市長はクレモナ、サヴォーナ、サン・レモ、ティヴォリ、トレカーテ、ブッソレーノていど、共産党の指導下にはいった COOP も数組織にすぎなかった。

イタリア共産党は地区を基とする組織として出発しており、中央のもとにヴェネントをのぞく63の県同盟 (federazioni provinciali) をおき、そのもとに1,200の支部をおいた。工場における党と労働者の結びつきは規約のなかにあらわれておらず、工場細胞については規定されていない。婦人党員は400人、96の支部で婦人グループがつくられた。共産党の組織は、コミンテルン第Ⅱ回大会で確定されたモデルにしたがい絶対的に中央集中化され、きびしい規律をもつものであった。各党員は指導の決定にしたがうこと、入党にあたっては6ヵ月の候補期間をおき、正当な理由なしに、ひきつづき3回会合に欠席すると名簿から削除された。機関紙、青年運動は中央委員会のコントロールをうけ、県同盟の書記も中央委員会によって指名され、執行委員会は全国執行委員会に直せつ従がうことになる。全国執行委員会は合議制がさだめられており、書記長はおかれていない⁽³⁾。イタリア共産党の組織は中部—南部イタリアでよわく、エミリアとトスカーナの農業県、また北部でもロンバルディアとヴェーネトでよわかった。

共産党がその機関紙として承認した新聞は第1表のとおりである。このうち重要なものは、トリノのオルディオ・ヌオーヴォ、トリエステのラヴォラトーレ、ミラノのコムニスタで、それぞれグラムシ、トゥンタール(のちジェンナーリ)、トリアッティが編集の任にあたった。コムニスタは当初隔週刊であったが21年10月に日刊となり、刊行地もローマにうつされた。印刷部数はオルディネ・ヌオーヴォ45,000、ラヴォラトーレ16,000、コムニスタ10,000部だが、3紙とも赤字

イタリアの労資関係と諸政党についての覚えがき (3)

第1表 1921年におけるイタリア共産党機関紙

イル・コムニスタ	隔週刊	ミラノ	21.10.11日刊に
オルディネ・ヌオーヴォ	日刊	トリノ	
イル・ラヴォラトーレ	日刊	トリエステ	
ラッダ	週刊	ソンドリオ	1921~22. 2. 3
アツィオーネ・コムニスタ		フィレンツェ	
バンディエーラ・ロッサ		アンコーナ	
バンディエーラ・ロッサ		サヴォーナ	
バッテリーア・コムニスタ		マッサ	1921. 2.12~21. 6.25
		カッラーラ	
		ヴェルシリア	
ボルシェヴィーコ	週刊	ノヴァーラ	1921. 3. 3~22. 6.21
コムネ	週刊	コモ	1921. 2.25~22.10.27
エーコ・デイ・コムニスティ	週刊	クレモナ	1921. 2. 5~22.12. 9
エーコ・デイ・ソヴィエト	週刊	ヴェネツィア	1921. 2.24~21. 8.25
ファルチェ・エ・マルテッロ	週刊	トリノ	~21. 8.27
ラ・ジョーヴァネ・ウンブリア		スポレート	
ラ・ロッタ・デイ・クラッセ	週刊	フォルリー	1921. 4. 3~21. 6.11
イル・プロレタリオ・コムニスタ	週刊	マントヴァ	1921. 1. 5~21. 4.16
イル・ソヴィエト		ナポリ	~22. 4.29

A. Leonetti; "gli atti di nascita del PCI", pp. 79~80, Savelli, 1975.

であった。理論雑誌ラッセーニャ・コムニスタはボルディガがちょくせつ影響力をおよぼした。週刊のシングカート・ロッソ（赤色組合）の印刷部数15,000、共産青年同盟の機関誌アヴァングワルディア（前衛）の発行部数25,000である。

イタリア共産党はまたレーニンのシェーマにしたがって、党の側面で活動する非合法組織をおいた。激化しつつあるファシストの暴力に対抗しなければならないという直接の必要もあったのであろう。ファシストの暴力はすでにトリノの工場占拠がおわった1920年の秋からきざしがあらわれていたが、21年にはいってからは毎週のようにカーメラ・デル・ラヴォーロ、左派のにぎる市庁舎、COOPなどが略奪され、放火される。エミリア、トスカーナではじまったこの攻撃は北部の工業地帯に拡大し、6ヵ月間で59のカーサ・デル・ポポロ、119のカーメラ・

イタリアの労資関係と諸政党についての覚えがき (3)

デル・ラヴォーロ、107のCOOP、83の農民レーガ事務所、141の共産党・社会党支部、100の文化・レクリエーション・チルコロ、28の産業別・職業別組合が攻撃され、放火された⁽⁴⁾。

1921年の1月1日から4月7日までのあいだにファシストと社会主義者のあいだの衝突で死者102人（ファシスト25人、社会主義者41人、その他16人、公機関関係者20人）、負傷者388人、5月13日から同月31日までのあいだに死者71人（ファシスト16人、社会主義者31人、その他20人、公機関関係者4人）、負傷者216人へのほり⁽⁵⁾、この衝突のなかでファシズムはその組織を急増させる。つまり21年3月31日から8月末まで支部数は317から1,001へ、加盟者数は80,476から187,098へと増大した⁽⁶⁾。イタリア共産党の非合法組織は、このファシストの攻撃に対抗するためにも必要であった。

この非合法組織は10人の党員・親派からなり、状況におうじて一時期地下活動をおこなうよう準備をととのえ、また防えいと攻げきのために武装の準備をする、というものであった。ファシストとの武力しょうとつのなかのデモ・集会の防えいなどこの非合法活動は各県組織の重要な任務となり、トリノ、ミラノ、ローマ、ノヴァーラ、ジェノヴァ、トリエステなどでは稠密にそしきされた。たとえばトリノでは10人からなる小^{スグワードラ}隊を5ないし10あつめて中隊をおき、補助隊もおかれた。青年共産同盟はこのような軍事組織で重要な役割をえんじる。党の執行委員会の一員で非合法組織を担当し、ミラノの司令官をつとめたフォルティキアーリとならんで、ロンゴはトリノ、ピエモンテで非合法組織の組織化にあたり、ベルティはローマの司令官をつとめた。武器としてまれには工場にいとくされてきた機関銃もあったが、いっばんにはリボルバー、銃、棍棒ていどのもので、そのうえ数もすくなく、ファシストとのあいだの武器の格差は歴然としていた。それにもかかわらず攻撃がおこなわれたそれぞれの地方、それぞれの場で党員たちはきわめて勇かんに闘かった。この非合法活動の経験は幹部を教育し、のちにスペイン内戦、イタリアにおけるパルチザン闘争につらなる貴重な財産となる。ただしこのゆうかんさで共産党員をとくべつあつかいにする必要はない。社会党員も

イタリアの労資関係と諸政党についての覚えがき (3)

アナキストもおなじように勇敢であったとみなしてよい。労働組合や COOP などの組織のあつとうきによくが社会の手にのこっていたために、ファシストの攻撃もむしろ社会党傘下の組織にたいして苛烈におこなわれ、したがって多くの社会党員もこの攻撃にたちむかった。

イタリア共産党の成立直後、「ボルティガは、新しい党の絶対的支配者であった。」⁽⁷⁾つかれをしらぬボルティガは機関紙誌で意見をのべ、いたるところの集会に出席して発言、党の下部そしき、機関紙誌、議会グループ、労働組合、共産青年同盟は、党の執行委員会により、とくにそのなかのボルティガにより強力にコントロールされた。

イタリア共産党が結成された3ヵ月ごの21年4月7日、ジョリッティは下院を解散し、5月15日総選挙をおこなった。イタリア共産党がこの選挙にどのようなぞんだかにかんたんにふれておく。党の最高指導者であるボルティガはすでにのべたように共産党の成立直前に棄権主義を放きしたのだが、彼は骨のずいから棄権主義者であって、みずからは候補者となることをがんとして拒否した。そ

第2表 選挙結果

		得票数	議席数
1919年	社会党		155
	人民党		100
	自由党・民主派		179
1921年	社会党	1,569,559	122
	共産党	291,952	15
	人民党	1,347,000	107
	国民ブロック		275
	(自由, 保守, ファシ スト, 民主, 急進派)		(うちファシ ストは 35)
1924年	社会党	341,528	22
	統一社会党	415,148	24
	共産党	268,191	19
	ファシスト国民派	4,653,488	374
	人民党		39

イタリアの労資関係と諸政党についての覚えがき (3)

して選挙にのぞむ共産党の方針は、すべてに反対するために選挙に行くこと、この選挙をつうじて社会党を解体させることであった。選挙のきっかけは、社会党が34名を減じたとはいえ160万票をえて122名を当せんさせたのにたいして、共産党は30万票で15名を当選させたにとどまった。

1921年に成立したイタリア共産党の組織はおおよそ以上のとおりだが、この時期は「内戦」がおこなわれている時期、それもファシストの優勢のうちに内戦が展開されている時期である。この年の8月3日、ファシストと社会党のあいだで平和協定がむすばれたが、ファシストは9月にふたたび暴力による攻撃を再開し、11月9日にはファシスト党を結成する。ファシズムは22年2月の労働同盟(Alleanza del lavoro)を踏みたおし、10月にはローマ進軍によってムッソリーニ政府を誕生させる。この内戦を劣勢裡に展開している社会主義運動のかわは、その勢力を急速に低下させる。21年に200万人の組織勢力を有したCGLは、22年には80万人に、150万人の人員を組織していたFederterraも20万人に低下し、リヴォルノ大会で21.6万人の党員を有した社会党は21年10月には10.7万人、22年10

第3表 イタリア共産党の党員数の推移

1921年	42,790人
22	24,622
23	8,698
24	12,000
25	25,000
26	16,000
27	6,521
30	5,521
31	5,638
32	7,554

この数字は、数字をとった時点も各年によって異なり、また共産党が半非合法、非合法状態におかれてからは、性格が相違する。大ざっぱな傾向を把あくする参考にとどめるものであろう。

G. Amendola, Storia del PCI よりまとめた。

第4表 フランスへの移住者数

1921年	44,782
22	100,000
23	167,000
24	201,000
25	145,528
26	111,252

P. Spriano, "Storia del PCI" II, p. 100.

月には7.3万人へ縮小、23年4月には1万人にまでおちこむ。勢力の急激な縮小は共産党にとっても同様であった。リヴォルノ大会ごとに4.3万人を有した党勢は22年に2.5万人、23年には0.9万人に縮小する。この勢力の低下には、内戦の過程で工場から解雇されてフランスに移住する労働者の数が多数にのぼったことも原因している。

1922年10月に政府を形成したファシズムは、従来の運動としての攻撃にくわえて政治権力を行使して社会主義運動の抑圧をつよめる。この時点からイタリア共産党は半非合法下におかれることになったといつてよいかもしれない。ムッソリーニは12月30日、ボルディガ、グラムシ、ナタンジェロ、アルクーノ、カミッラ・ラヴェーラ、スコッチマルロ、ペルーソ、プレスッティ、タスカラモスクワのコミンテル大会への代表を逮捕するように命ずる。23年2月3日ボルディガ、3月1日セルラーティ、同月31日グリエーコが逮捕されたのをはじめとして、2月から4月のあいだに中央委員のほぼ全員、県同盟書記72人、青年共産同盟県書記41人をふくめて数千人の共産党員が逮捕された。多数は取調べ室だけで釈放されたが、5月には青年共産同盟の地下本部でベルティ、ロンゴ、グエルマンディ、カッシッタが逮捕される。

この間、議員特権によって逮捕されないレポッシ、グラツィアディ、ベッローニが構成する合法的な党の《中央事務局》がローマに維持されていたが、実質的な執行委員会はテルラチーニの双肩にゆだねられた。執行委員会は3月5日、臨時のメンバーとしてトリアッティとスコッチマルロを協力させ、中央委員会にス

イタリアの労資関係と諸政党についての覚えがき (3)

第5表 1923年におけるイタリア共産党抑圧の推移

1923. 2. 3	ボルディガ	逮捕	9カ月間獄中に
3. 1	セルラーティ	逮捕	～6月5日まで
3.31	グリエーコ	逮捕	
2～4月	中央委員のほぼ全員 72人の県同盟書記 41人の青年共産同盟県書記		} 逮捕
5月	青年共産同盟の地下本部でベルティ、ロンゴ、ゲルマンディ、カッシッタ	逮捕	をふくめて数千人の共産黨員逮捕。ただし多くは調べ室のみで釈放 アヴァングワルディア停刊
23. 9.21	トリアッティ、ジェンナーリ、モンタニャーナ、ヴォータ、タスカ、ゲルマンディ	逮捕	
23.10. 23年末	31人の裁判おこなわれる 裁判の結果はコラッツォーリ（4カ月の判決）をのぞいてボルディガ、トリアッティ、テルラチーニ、タスカら無罪、釈放		

コッチマルロ、カミッラ・ラヴェーラ、タスカ、グラツィアデイを協力させることにした。タスカとグラツィアデイの名は、イタリアに在住するコミンテルン代表の指示によったという。この時期のコミンテルンとイタリア共産党の関係についてはすでにのべたとおりである⁽⁸⁾。ただしタスカは、コミンテルンの路線にそった熱心すぎる社会党との合同論を遠ざける意味もこめてスイス、パリーへ派遣されており、トリアッティは病氣療養中であった。4月末、トリアッティは任務につき、テルラチーニがモスクワへ、スコッチマルロがベルリンへおもむくとともに実質的に指導の責任をになうことになる。イタリア国内ではトリアッティにカミッラ・ラヴェーラ、A.レオネッティ、リータ・モンタニャーナ、G.アモレッティ、F.プラトーネが協働、のちにタスカも帰国して経済労働組合部門を担当する。

共産党は、黨員として名のりをあげていないものに従来以上に注意ぶかく行動するように注意するとともに、党の下部においても黨員が相互に接しよくしないようにし、さらに、いくつかの州をまとめて指導する体制をとって、党の中央と

イタリアの労資関係と諸政党についての覚えがき (3)

の連絡をとる者をよく訓練されたただ1人の専従者とした。だが9月にはトリアッティ、ジェンナーリ、モンタニャーナ、ヴォータ、タスカ、レオネッティにくわえて、婦人部門の指導者テレザ・ノーチェ、カテリーナ・ピッコラートらが逮捕される。

23年10月には起訴された31人の裁判がおこなわれた。検事のがわはボルディガ、フォルティキアーリ、テルラチーニ、ベルティ、ニューディ、グラムシに18ヵ月、タスカ、ジェルマネット、アッザーリオに14ヵ月等々の刑を求刑したが、自由主義者である弁護士 M. フェッラーラ の弁論が効を奏し、裁判所はコラッツォーリに4ヵ月の判決⁽⁹⁾を言いわたした以外全員の放免を命じた。この時点では《自由主義国家》はまだファシストの思いどおりにうごいていない。

釈放されたイタリア共産党の指導者たちは、それぞれ組織の先頭に復帰するが、ボルディガだけは指導部のどのような任務につくことも拒否し、1人ナポリにとどまった。ボルディガ派の重鎮であったグリエーコは党の中央で機関紙・宣伝の仕事をはきうけ、タスカも任務に力をそそいだ。

1924年になると共産党は大きな困難を克服して、あるていどの勢力を回復する。24年の2月12日からウニタを発行し、3月1日からはオルディネ・ヌオーヴォを15日刊として再刊する。前者の発行部数20,000~25,000部、後者の第1号は6,000部であった。ウニタは共産党と、社会党第Ⅲインター派と共同で編集された。

24年4月の総選挙前の共産党の勢力は、候補2,000名をふくめて12,000名、うち婦人党員は500名である。これらの党員は815の地域支部に属していたが、ほぼすべて地下活動のかたちをとっていた。選挙については、社会党第Ⅲインター派と協力、「プロレタリア統一グループ」として15の選挙区中、アブルツォとサルデーニャをのぞく13の選挙区で候補者リストを提出することができた。候補者108人が共産党、48人が第Ⅲインター派、全体の4分の3が労働者である。「プロレタリア統一グループ」は19議席をかくとくし、共産党13、第Ⅲインター派5、独立派1と配分された。

24年4月の選挙のあとに生じたマッテオッティの暗殺事件とアヴェンティーノ

イタリアの労資関係と諸政党についての覚えがき (3)

連合により、ファシスト政府は一時苦境にたつが、この危機をのりきったあと、出版の自由、結社の自由、地方自治を制限する法律、政府の緊急特権を確保する法律をつぎつぎに施行、統一社会党、P.ゴベッティの《リヴォルツィオーネ・リベラーレ》を抑圧し、独裁体制の確立にむけて急速に歩をすすめる。

(2)

26年10月31日、ムッソリーニが15歳の少年におそわれた事件をきっかけにして、11月にファシズムは全面的な独裁体制に移行、共産党はさらにきびしい抑圧の対象になる。グラムシ、ボルディガをはじめとする多くの指導者、党員がたいほされた。政治局員のうちグラムシ、スコッチマルロが（テルラチーニはすでに8月から獄中にあった）、中央委員、同候補のうち、ボルディガ、バニョラーティ、アッレガート、フレッキア、ロヴェーダがたいほされた。27年のはじめのイタリア共産党の指導部の会合では、約1,000人がたいほ、投獄、流刑され、約100人の指導者・幹部が国外にのがれたことがあきらかにされている。ここで共産党がグラムシをこの大抑圧からすくう方策をとらなかったのかという問題があるが、カミッラ・ラヴェーラによると、グラムシは11月4日に出国してスイスにむかうことになっていたのだが、ソ連共産党内の争いをめぐる中央委員会がひらかれることもあって、計画どおりにすすまなかったという⁽¹⁰⁾。こうしてリヨン大会で選出された執行部のうちたいほをまぬがれたものはカミッラ・ラヴェーラ、グリエーコ、トリアッティ、ラヴァッツォーリの4人だけとなる。27年2月1日から特別法廷が機能を開始する。

イタリア共産党はこのおおきな打撃にたいしてつぎのような対応策をとった。政治局メンバーのうち自由をかくほしているトリアッティ、カミッラ・ラヴェーラ、グリエーコに、候補としてレオネッティ、タスカ、トレッソ、シローネが協力、シローネ、リ・カウジ、トレッソ、T.ニスキオ、その他2名が中央委員会に協力する、また、トリアッティと、グリエーコ、タスカが国外センターを構成、トリアッティとともにモスクワにいたニューディが移民のあいだでのしごとをう

イタリアの労資関係と諸政党についての覚えがき (3)

けもち、カミッラ・ラヴェーラが書記局の責任、したがってまた国内センター指導の責任をになうことになった。書記局の事務所その他を再建する場としてジェノヴァがえらばれ、ラヴァッツォーリの指導する労働組合事務所はミラノにおかれた。

なお、カミッラ・ラヴェーラや、ベルティの著作によると、この大抑圧直ごの11月8日～10日ごろ、たいほをまぬがれた5～6人の幹部がミラノにあつまり、タスカの提案にしたがって共産党を形式的に解散し、研究グループをつくって最悪の時期がすぎるのをまつ、という決議をしたとしている⁽¹¹⁾。しかしカミッラ・ラヴェーラとコミンテルン代表はこれを承認せず、決定はとりけされ、記録からも抹消されたという。このようなエピソードにもかかわらず、この抑圧ごもならなかのたちでセンターとむすびついている党員は国内に5,000人あったといわれる。各指導機関はうえから指名され、細胞の最小単位は10名から5名に縮小された。青年共産主義同盟については、ロンゴがドッザのたすけをえて国外センターの指導を、セッキアが国内センターの指導をうけもつことにし、機関紙誌のめんでは27年1月1日からウニタを15日刊として続刊⁽¹²⁾、また3月1日には理論誌としてスタート・オペライオの第1号⁽¹³⁾を発刊した。なおウニタの印刷部数は40,000部をこえていたという。また各地でも新聞が再刊された。この指導部のかなめになるのはトリアッティである。しかしこの時期のトリアッティはまだボルディガやグラムシのもっていた声望と権威をもっていたわけではなく、「同輩中の第一人者」、「書記局作業の責任者」として指導にあたったのである。

この大規模な抑圧にたいしてイタリア共産党は迅速に対応策をとったと評価してよいだろう。しかし27年はじめに各地で新聞が再刊されたことなどが楽観的な気分をうみ、事態が根本的に変化したという認識がゆきわたったとはいえないようである。治安当局がもぐりこませたスパイなどへの注意も十分でなかった。そのため、ファシストのひきつづく抑圧により共産党は大きな犠牲をだしつづける。27年3月からすくなくとも1,000名の「活動的共産党員」がたいほされたり国外に難をのがれ、こうして23の県で党員がいなくなつて、県規模で機能してい

イタリアの労資関係と諸政党についての覚えがき (3)

第6表 ファシスト

	1927	1928	1929	1930	1931	1932	1933
判決							
政治的犯罪	57	154	43	35	84	44	20
政治的犯罪で他の裁判所へ送付	—	—	—	—	—	—	—
植民地特別法廷へ請願	—	—	—	12	—	—	—
スパイ	2	4	2	19	3	13	11
食管・価格・密輸犯罪	—	—	—	—	—	—	—
戦時下の殺人・強盗・暴行	—	—	—	—	—	—	—
サボタージュのため他の裁判所へ送付	—	—	—	—	—	—	—
その他の犯罪	—	—	—	—	—	—	—
文書送付等	—	—	—	—	—	—	—
被起訴者							
被起訴者	255	914	210	258	703	278	62
有罪	219	636	159	199	519	213	59
無罪	36	255	51	59	183	64	3
男	250	888	206	249	699	273	61
女	5	26	4	9	4	5	1
年少者	37	130	39	38	151	32	3
労働者・職人	168	665	154	182	559	226	47
農民	29	41	12	26	66	17	1
専門職業家	18	43	8	11	21	9	1
商人	9	39	10	9	25	7	6
職員	17	53	12	9	15	13	1
学生	2	19	5	10	4	5	4
家事	2	5	2	2	—	—	—
その他	10	49	7	9	13	1	2
判決							
年数	1,371	3,404	930	962	2,061	1,449	408
月数	7	4	6	8	8	4	11
日数	10	7	12	—	25	15	—
死刑(死刑を執行された者)	—	1(1)	1(1)	4(4)	1(1)	2(2)	—
終身刑	—	—	—	1	—	—	—
刑期満了者	—	17	—	1	1	1	—
未判決者	—	6	—	—	—	—	—

資料 a cura di E. Collotti, *L'antifascismo in Italia e in Europa 1922~1939*,

イタリアの労資関係と諸政党についての覚えがき (3)

特別法廷の推移

1934	1935	1936	1937	1938	1939	1940	1941	1942	1943	合計
35	31	43	33	40	44	33	108	110	64	978
—	—	—	59	76	86	84	98	343	—	746
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	12
21	37	13	4	10	22	56	33	48	26	324
—	—	—	—	—	—	25	14	166	53	258
—	—	—	—	—	3	5	39	64	35	146
—	—	—	—	—	—	—	—	291	2	293
—	1	—	—	—	—	—	—	—	6	7
—	—	—	—	4	1	—	6	3	2	16
275	235	283	205	346	407	238	344	438	168	5,619
259	232	254	172	310	365	215	276	368	141	4,596
16	3	29	33	36	42	23	68	70	27	988
271	233	278	202	341	403	227	335	425	156	5,497
4	2	5	3	5	4	11	9	13	12	122
36	24	23	21	23	16	27	22	54	21	697
209	199	176	128	254	311	164	160	226	70	3,898
23	19	56	36	34	34	20	42	39	51	546
7	—	11	11	8	8	16	29	20	—	221
15	7	16	5	19	14	7	21	20	9	238
5	4	12	19	15	24	14	43	32	8	296
3	—	4	2	7	1	5	27	53	13	164
2	1	4	—	3	1	4	4	2	5	37
11	5	4	4	6	14	8	18	46	12	219
1,297	1,237	1,557	997	1,642	1,988	1,337	2,188	3,548	1,349	27,735
7	6	9	10	6	9	5	3	10	9	5
—	—	—	10	10	—	—	20	—	—	19
—	—	—	—	—	—	—	11(7)	21(15)	1(—)	42(31)
—	—	—	—	—	—	1	—	1	—	3
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	19
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6

pp. 328~329 loescher, 1975.

イタリアの労資関係と諸政党についての覚えがき (3)

る組織は47になった。5月の党員は6,771名である。青年共産主義同盟は4～5月の時点で2,800から3,000人の同盟員を保持していたがこの年の末には3分の1に減少する。27年6月には「もはや工場にいかなる新聞もなく、地方にどのような新聞もなくなった。」⁽¹⁴⁾。

共産党は「国内」センターを一時的にスイスのルガーノにうつさざるをえなくなり、国内にはトレッソ、シローネ、ラヴァッツォーリ、セッキアラがのこる。書記局の指導にはトリアッティ、グリエーコ、カミッラ・ラヴェーラが、機関紙・宣伝にはレオネッティ、シローネが、労働組合の指導にはラヴァッツォーリがあたり、タスカはパリでスタート・オペライオの発行にあたった。「国内」センターはルガーノに数ヵ月間おかれたのちおなじくスイスのバーゼルにうつされる。「逮捕をまぬがれた者やよわい組織を投げこんだ過渡の努力は重大な結果をひきおこした。適切な準備のともなわない行動は、警察の仕ごとを容易なものにした。すでに春に労働総同盟ミラノ委員会が発見され、片づけられた。5月にはパヴィーアでパオロ・ベッティが、ブレッシアでルイージ・スカルミニャンが逮捕、6月にはソ連から25年に帰国していたジョヴァンニ・パロディと、アルティエロ・スピーネリが逮捕された。6月と7月にはエミリアとトスカーナの組織網が破壊され、チェレステ・ネガルヴィッレ、ヴィットリオ・バルディーニ、エジスト・カッペッリーニ、イリオ・パロンティーニが逮捕された。おなじ時期にヴァレーゼでレナート・ピトッシ、ミラノでフランチェスコ・レオーネ、アゴスティーノ・ノヴェッラも逮捕された。1927年末にはイタリア共産党の非合法組織はじっさいにはまひすることになる。」⁽¹⁵⁾。

特別法廷は1927年中に219人に禁固をいいわたした。多くが共産党員で、刑期は10年、12年、14年におよび、ピラを配布したという理由だけで4年から5年の判決をうけた。欠席裁判とはいえグリエーコのうけた判決は17年6ヵ月、G. S. ティットットの判決は23年8ヵ月である。219人のうけた禁固の合計は1371年にたつする。

イタリア共産党の上級幹部33名にたいするローマ裁判は28年5月にはじまり、

イタリアの労資関係と諸政党についての覚えがき (3)

グラムシに20年4ヵ月5日、テルラチーニに22年、ピボロッチェに17年の禁固が
いいわたされる。

28年の警察による抑圧は27年のその3～4倍ちかくにたった。27年に起訴
された者255人にたいして、28年のそれは914人、有罪判決をうけた者219人にた
いして、28年のそれは636人、刑期合計年数は27年の1,371年にたいして、3,404
年におよんだのである。「29年の前半にはイタリア共産党の国内における活動は
ほぼ無になる。」⁽¹⁶⁾。

(3)

コミンテルン第Ⅶ回大会(28年7～9月)と第10回拡大執行委総会(29年7月)
までは、イタリア共産党における討論はかなり自由におこなわれてきた。右派の
ボンパッチとグラツィアディが28年に除名された例をのぞくと、路線の論争に
由来する組織処分はなかった⁽¹⁷⁾。ボンパッチのばあいはファシズムに接近した
ことによる除名であり、グラツィアディのばあいも、マルクス主義に批判をなげ
かける論文を発表し、自ら党をはなれるようなかたちで除名されたものである。
26年のリヨン大会でボルディガはいぜん中央委員にえらばれ、コミンテルンへの
出向さえ依頼されている。

ところが、統一戦線から「階級対階級」戦術、社会ファシズム論へのコミンテ
ルンの転換、ソ連共産党におけるスターリン独裁の確りつを反映して、29年から
30年にかけてイタリア共産党はたてつづけに除名者をだす。このことはすでにの
べたとおりである。ここで検討しておくことは、とくに3人グループおよび他の
政治グループの批判と反発をよんだ、指導組織を国内に再建すべきだとするロン
ゴラの計画がどのように実行されたかということである。「イタリア人移民のな
かの、兄弟諸党に加入している移民共産主義者というかぎられたグループのあ
いだでは……、イタリア共産党のあたらしい政策は大いなる熱狂をひきおこし
た」⁽¹⁸⁾とみてよいようにおもわれる。

「共産党の非合法成員になり、イタリアに再入国して政治的に働こうとする自

イタリアの労資関係と諸政党についての覚えがき (3)

発的な申しいで数はふえた。……数おおくの逮捕者があつたにもかかわらず、成員のあいだには大きな熱意とつよい熱狂があつた。中央委員会所属の同志たちは後方にとどまっていようとせず、パリにおける《兵役忌避》にならないよう国内への秘密使者にくわえてくれと圧力をかけた。パリでは、イタリアから非法によばれた同志たちのための《短期研修》が数多くもたれた。この研修はおよそ1週間つづき、同志たちは居住地におくりかえされた⁽¹⁹⁾。

1930年6月、党と青年共産同盟の国内センターが再建された。党のセンターを指導するためにカミッラ・ラヴェーラを責任者としてE. ヴッキ、B. トージン、B. サンティアー、E. ザネッリの5人が潜入、青年共産同盟のセンターはF. マッジョーニ、D. クジーニ、L. サルヴァネスキの3人が指導する。国内センターはまず各地の党員とコンタクトをとり、印刷物の配布をおこなつたが、短期間でけんちよな結果をもたらしたとみることができる。とくにエミリア、トスカーナとじゅうらい改良派の影響力のつよかつた地域で共産党の力が大きくなつたことがめだつ(この勢力はレジスタンスをへてふかく根をおろし、これらの地域を赤い州にする)。5月1日にまかれた新聞32,000部、ピラ150,000部は、すべて各地の下部組織で印刷する力をもつにいたつた。この日には「ドゥーチェに死を!」「共産主義的5月1日万才!」などのスローガンがあちこちにかかれ、「アヴァンギャルディア」は「内戦の前夜」と表現した。8月1日の国際反戦デーにもほほ似た状況がみられた。

第7表 1930年てんかん直後の党員数

ピエモンテ	369人
ロンバルディア	345
ヴェネツィアージュリア	497
エミリア	1,139
トスカーナ	606
ウンブリア	17
プッリエ	250

資料 P. Spriano, Storia del PCI

イタリアの労資関係と諸政党についての覚えがき (3)

アメリカの大恐慌がイタリアへも波及し、その影響が失業者数、賃金のひきさげなどにけんちよにあらわれ、これにたいする勤労者の抵抗も表面化していた時期にあっていたことも、潜入プランの実行をゆうきづけたようである。失業者700,000人、賃金のひきさげに抵抗する職場での行動は29年190件、30年176件もあり、国内センターの再建にむけられたエネルギーはいくつかの紛争に関与することに成功した。

31年の2月にはナポリで3,000人の木綿工場労働者が24時間のスト、3月にはセルヴィアーナけい谷で500人の労働者が24時間のスト、レニャーノでは880人の労働者が官憲の介入を排除して5日のあいだ工場をとめている。トリノでは失業者の職よこせデモがおこなわれ、4月にはフェッラーラで1,200人がストライキにはいつている。6月半ばには、米作労働者のストが発生した。ヴェルチェッリ、ノヴァーラ、エミリアで、日給を14リラから8リラにひきさげるといふ農業企業家の処置に抵抗して数万人がストライキにはいつたのだが、イタリア共産党は5月までに《ラ・リザイア》をひそかに配布しており、ここにも党の影響がみとめられる。ストライキには労働裁判所が介入し、賃金のひきさげを16%におさえるということと解決した。

ただし国内の再組織計画にたいするファシストの側の反撃もきわめて迅速であった。30年6月に再建された国内センターのだいぶぶんは建設ご1ヵ月あまりでファシズムの手におちてしまうのである。7月10日、カミッラ・ラヴェーラは反戦デー（8月1日）の準備のため、トージン、ヴェッキーらとマジョーレ湖畔のまちでおちあうことにしていたが、ヴェッキーはあらわれず、ラヴェーラ、ジッリ、トージンは数十人の警察官にかこまれてたいほされる。これら国内センターの指導者をふくめ1930年後半には15人の党専従家、数百人の活動家党員がたいほされた。多数の党員がまとまってたいほされたケースをみると7月にミラノで30人のタクシー運転手、8月ミラノで35人、11月にはパルマで24人、モーデナ17人、ラヴェンナ87人、ヴォルテッラ27人、エンポリとフィレンツェで43人、イーモラで89人がたいほされている。カミッラ・ラヴェーラらがファシズムの手におちた

イタリアの労資関係と諸政党についての覚えがき (3)

さいに約束のばしょに姿をあらわさなかったヴェッキーにはファシズムと妥協したのではないかという疑惑が生じ、のちにヴェッキーがパリにもどると査問にかけられ、10月25日青年共産同盟は死刑を宣告、執行した。「執行」を生きのびたヴェッキーの事件はフランス・ジャーナリズムのかつこうの対象となってそのごの活動に一定の障害となったようである。

しかしイタリア共産党の側もねばりづよく潜入者をおくりつづける。逮ほされた国内センターの指導者のかわりにG.ドッザとD.チュフォーリが到着し、逮ほ

第8表 イタリア国内への派遣者数

1928年	20人
30年	81
31年1月～9月	71
31年11月～32年7月	102

Amendola, Sioria de PCI, p. 203.

をまぬがれたサンティアーらと指導にあたる。国外センターは、さらに第Ⅳ回大会の準備活動をおこなうために27歳のセッキアを潜入させる。ただし派遣されたセッキアとサンティアー、ドッザ、チュフォーリらの関係はかならずしも明確でない。スプリアーノもアメンドラも1931年の1月から3月のあいだに、セッキアの指導のもとでまだ組織をもっているすべての県で第Ⅳ回ケルン大会前の会合がひらかれたとしているにすぎない⁽²⁰⁾。しかしその間アスティとアレッサンドリアでは党のすべての組織が発見されて30人がたいほ、3月にはフィレンツェで22人、トリエステで31人とたいほがつづいている。4月3日にはトリノでセッキアもファシズムの手におちた。

31年4月の第Ⅳ回ケルン大会ご国内センターの指導にはサンティアー、S.ヴィンチェンツィ、テレーザ・ノーチェがあたったが、このセンターの寿命もみじかく、31年5月、青年共産同盟の責任者C.メッローニがミラノで逮ほされ、6月28日には州レベルの書記のだいぶぶん、多数の労働者とともにサンティアーが逮ほされ、数日ご、やはり国内センターの任務についているアルピが20人の党員

イタリアの労資関係と諸政党についての覚えがき (3)

といっしょにバルマで警察の手におちる。7月にはブリエとミラノで、8月には国外からの使者と国内の指導者が、11月にはミラノで22名がたいほされた。国内センターを維持するため、フラウジンがおくられたが、32年の春にはセンター全体がたいほされてしまう。内務省の統計によると、31年1月1日から32年4月30日までに1,595人が(全員が共産党員だったわけではないが)警察の手中におちたという。そこにはイタリアへの潜入者60人がふくまれている。

1932年にもストライキやデモンストレーションが各地でおこなわれた。3月にはチェリニョーラで千人の農業労働者が集会をひらき、ヴィーコ・ラツィオで市庁舎をとりかこむデモ、レッチェのトレプツィで500人のたばこ工場労働者がストライキ、4月にはカッラーラで2,000人の採石工がストライキをおこなった。ただしこれらの行動は失業者の一揆的な抵抗、農業地帯における闘いであって工業地帯の大工場には波及しなかった。32年の共産党員は6,000人おり、うち3,000人は青年であるが、従業員100人以上の企業内の党員は300人をこえなかった。共産党の組織が政治生を有するのはエミリアとトスカーナのみであった。

第9表 てんかん直後の工場細胞員数

トリノ	65
ミラノ	70
FIAT Lingotto	11
Breda San Giovanni	2
Brown Boveri	6

資料 第7表におなじ

警察はすでに共産党の組織の全メカニズムを完全にしておき、国外センターからの潜入者を察知してもある期間自由に行動させ、潜入者とともに国内の組織をいっしょにあげるといった方式をとった。3月に国内センターの関係者は全員たいほされ、5月にはピアチェンツァで134人以上がたいほ、地下の印刷所も発見された。特別法廷はサンティアーに17年、G.メンコーニに17年、E.レアーレに10年というようにつぎつぎと重刑をかしていった。こうして1932年下半年期になると、共産党の組織は急速で数のおおいたいほ者をうめることができなくなる。32

イタリアの労資関係と諸政党についての覚えがき (3)

年末には国内センターの全指導グループが逮捕される。

国外センターはなおもジャン・カルロ・パイエッタを派けんしたが、33年2月逮捕される。おなじ33年春、国外センターは、有能なオルガナイザーであるれんが工のアルトゥーロ・コロンビをおくりこみ、リグリア州でレオニーダ・ロンカッリ、ジョヴァンニ・ロッソ、アンジェロ・ベーヴィラックアと協力して任務につかせたが、これも逮捕、任務をつづけた3人も34年4月までにいずれも逮捕される。「すでに32年から散在的になっていた党の活動は、34年いこう組織的な性格をまったく失う。」⁽²¹⁾。

こうした事実は組織上の問題であるとともに、政策上の問題でもあった。つまり、現時点が体制の破局的危機の状況にあり、革命の波動が生ずるといふみとおしは弱まらざるをえなかった。コミンテルンの批判をへてイタリア共産党は、宣伝と組織の方向を、直接的な要求、民主主義的なスローガンに変更し、さらに夏のおわりには、現状が回復することのできない資本主義の危機であって革命的行動を必要とするのだというみとおしから、より長期的なみとおしを強調する方向へいどうする。

32年8～9月のコミンテルン拡大執行委員会総会が非合法性と正面しょうとつ戦術を否認し、イタリア共産党も33年3月の中央委員会で国内組織再建プランについて結論をつける。ロンゴは組織委員会の指導のしごとをはなれることになり、コミンテルンにおけるイタリア共産党代表としてモスクワにおもむくことになったのはすでにのべたとおりである。このロンゴにたいする処置と、ロンゴの態度には、「ページがめくられたばあいには過去に固執しないというイタリア共産党の伝統的な慣習がみられる。」⁽²²⁾。

この国内指導部の再建プランの結果については、レオネッティやボッカのように貴重な幹部を失なったとして、やや否定的に評価する見解と、アメンドラのように国内との結びつきにおける遺産を強調する見解がある。アメンドラの見解はつぎのとおりである。

「《転換》は当初さだめた政治目標に到達できなかったし、その理由づけはイ

イタリアの労資関係と諸政党についての覚えがき (3)

イタリアの状況の現実的な発展と矛盾していたとしても、共産党はこの《転換》によって国内とあたらしい関係をうちたて、政治的にきわめて成熟し、道徳的にもいちじるしくきたえられて決定的な試練にのぞもうとするあたらしいエネルギーを結集したのである。」⁽²³⁾。

(4)

人民戦線へのてんかんは、社会党その他の政治勢力との行動統一をすすめ、イタリア共産党内の論議をこぼつにしたが、それはあくまでパリの政治移民のあいだでのことであった。この当時フランスには85万人のイタリア人がいたという。これが亡命政治家をささえる母体であるが、反ファシズム意識を明確にもっているのは5万人、そのうちイタリア共産党への加入者4,000~5,000人、社会党への加入者600人、アナキスト200~300人である。共産党の組織した《統一戦線》という大衆組織の加入者15,000人はこの党にちかいし、またブオッツィの組織する組合センターに加盟する700人は社会党にちかいとみなすことができる。週刊誌《正義と自由》の読者は3万人、共産党の《グリード・デル・ポポロ》の読者もほぼ同数であった。

共産党の国内センターはすでに1933年いらい存在せず、その組織力はいちじるしく低下しており、人民戦線への転かんでもこの状況にさしたる影響はあたえない。

国内センターを中心とした共産党の組織活動はこのように1933年からほぼとどえるが、第6表にみられるとおり、特別法廷に起訴される者の数は毎年200名から400名のあいだをたもっている。これは共産党や社会党と組しきの結びつきをもたないが、エチオピア併合、スペイン内乱などを批判的に考察する労働者青年の小グループが簇生しだしていたことによる。これらの青年たちのなかには、のちに共産党の歴史で重要な役割をはたすものも少なくないが、まだ私的な個人的接しよの段かいにあるものが多く、共産党や社会党の組織にむすびつくものはごくまれであった。

リットリアーリとはファシズムが積極的に開催したスポーツ集会、文化集会な

イタリアの労資関係と諸政党についての覚えがき (3)

第10表 1937年におけるイタリア各地での反ファシズム運動 (一部)

フィレンツェ	共産党の派遣者と接触したために、M. グロンキ、P. ファリエロ、その他の青年たちが逮捕
ボローニャ	青年たちのグループが《人民戦線臨時委員会》をつくり、19人が逮捕
トリエステ	いく人かの大学生が労働者や職員と接触して共産党の通達をコピーし、哲学と政治を議論しているのを警察が発見、学生、共産党員逮捕 《人民戦線、イタリア共産党機関誌》という地下新聞発行。学生と労働者逮捕
カリアーリ	32人の自発的な共産党組織摘発
ジェノヴァ	合法活動をしていた多数の青年が、共産党派遣者とともに逮捕
サヴォーナ	P. トレヴィザンとA. バッチーノの指導するグループは20数人をあつめ、青年ファシショの指令部にまでしんとうしていた。
スペツィア	24名の青年と40名の年配者逮捕
トリノ	3つの労働者グループ摘発
ブラート	} 労働者、農民逮捕
シエナ	
ミラノ	
エミリア	

資料 P. Spriano, Storia del Partito Comunista italiano, III. pp. 201～203, よりまとめた。

どをいう。34年フィレンツェ、35年ローマ、36年ヴェネツィア、37年ナポリ、38年パレルモ、39年トリエステ、40年ボローニャでひらかれたが、参加者のなかから、M. アリカータ、A. アmendラ (ジョルジョ・アmendラの弟で、パルチザン闘争のなかで戦死)、P. イングラオ、G. ピントールをはじめ反ファシズムへむかうものが数おおくあらわれる。この時期の反ファシズムの動きをみるために、ひとつの例として1937年をとりあげよう。この年、イタリア各地でみられた反フ

イタリアの労資関係と諸政党についての覚えがき (3)

ファシズムのうごきをまとめると第10表のようになる。37年3月ボローニャでは青年のグループが「人民戦線臨時委員会」を形成、なんらかの大学生が夏のあいだに労働者とせしよくして共産党のピラをすりましている。トリエステでは一学生が「人民戦線、イタリア共産党機関紙」というちいさな新聞をへんしゅうし、失業中の船員がこれを印刷している。キャリアーにおいては32人の自発的共産主義者の組しきが発見されている。彼らはポエットの砂浜でしばしば会合をもっていた。チェリニョーラでは37年1月18人の青年がたいほされた。指導者のA. ディ・ドナートは共産党の使者と接しよくしていた。このような反ファシズムへのさまざまなうごきは、38年、さらに40年代へとれんぞくしている。

パードヴァ大学の物理学研究生であったE.クリエルの場合は、例外的に政治組織とのれんらくが密だったケースである。クリエルはすでに35年に共産主義者となることをきめ、2人の学生と党の細胞をつくり、パリに住む友人の学生をとおして党の国外センターと接しよくをとることに成功した。そのごいくたびかパリにおもむいてスタート・オペライオに論文を発表しセレーニらとあっている。国内でも大学新聞の主導権をにぎり、印刷労組の労働者との会合を組しきするなど情熱的な活動をつづけた。しかし、つぎの節でのべるイタリア共産党内の査問にまきこまれ、一時期社会党に接きんするという苦労をかさねる。そのごは進歩的民主主義の理論を展開するなど貴重な貢げんをするが、解放直前にナチズムの手にかかってたおれるのである。

クリエルをはじめとして、1930年代から40年代にかけて、各地で成熟してきたさまざまな個人、グループはレジスタンスのるつほのなかでまじりあうことになる。

30年代初頭の「転換」による国内センターの再建が抑圧されたのちイタリア共産党は、秘密組織を維持することに注意をはらった。これら秘密組織の党员と国外センターのあいだでは書簡による連絡がとりつづけられた。37年11月、グリエーコが中央委員会へ報告したところによると、36、37年におけるイタリア国内との連らくは第11表のとおりである。共産党はまたほそほとではあるが国内への使者をおくりつづけた。35年のさいしょの9ヵ月にイタリアへ派遣された使者は

イタリアの労資関係と諸政党についての覚えがき (3)

第11表 イタリア国内とのれんらく

	1936年	1937年
下部からの書簡	235	356
《合法家》の報告	184	238
《宣伝担当者》の書簡	231	187
《宣伝担当者》の報告	21	18
センターから《下部》への書簡	26	29

資料 P. Spriano, Storia del partito comunista italiano
III. p. 182.

28人であり、そのうち8人が違はされている。国内センターの再建は41年マッソ
ーラの成功をもってはじめて達成される。

(5)

36年2月の総選挙で人民戦線が勝利したスペインでは、7月フランコ將軍がモ
ロッコで反乱をおこしスペイン内戦がはじまる。スペイン内戦がイタリア共産党
とその周辺にあたえた影響はつぎのように指摘してよい。第1はこの内戦が、強
大なファシズム体制のもとで逼塞させられているイタリアの勤労者、知識人に一
条の光をなげかけたことである。のちにのべるように、スペイン内戦のニュース
をきいてファシズム・イタリアを脱出、スペインに到着するものは200人をこえ、
またすでにのべたようにイタリア国内でさまざまな反ファシズム・小グループを
簇生させるひとつの要因になった。第2は、もっぱらパリの政治移民だけを基ば
んにして路線をきそいあう政治グループが、内戦というさしせまった状況に強制
されて統一した隊列のなかでともに闘ったことである。この事実はファシズム
と闘かうイタリア人にとってひとつの政治的経験となる。第3には、とくにこの
内戦に直せつたずさわったものの経験は43年いこうのイタリアにおけるレジスタ
ンス闘争に継承される貴重な遺産となる。また別稿でのべたように「いたるところに敵はいる」というスターリンの肅清の論理にしたがってベルティらがはじめて
いた点検と査問の活動は、スペイン内戦への参加という窓口がなかったならば、

イタリアの労資関係と諸政党についての覚えがき (3)

いっそう陰しつなものになったのではないかとおもわれる。

39年3月マドリードが陥落してスペイン共和国は終えんするが、この間、内戦へのイタリア人の参加は3,354人、うち3,108人がさまざまな戦闘部隊に配置された。参加者の60%はフランスに在住するイタリア人で、イタリア本国からの参加者223人がこれにつき、アメリカからの104人、ベルギーからの98人スイス在住者60人、ソ連在住者58人とつづく。参加者を党派別にみると934人が共産党员、青年共産同盟27人、共産党の親派70人、これにたいして社会党员137人、無政府主義者118人、共和党员28人、正義と自由27人、トロツキー派34人、プロレタリア統一派28人、約1,000人が無党派と区分される。

死亡および行方不明600人、負傷2,000人、捕りょ100人、それぞれの数字のうち共産党员は361人、861人、23人をしめた。

戦闘への志願者はもともと数ヵ月というみとおしで参加してきたのだが、戦闘は2年以上もつづき、新規の参加者は36年の2,057人にたいし、37年には726人、38年には284人へと減少する⁽²⁴⁾。

スペイン内戦はこのような積極面とともに、スターリンによるトロツキー派の追及、共産党と無政府主義者の激烈な主導権争いと相互攻撃など冷静に評価すべき点が少なくないが、それは本稿の範囲外である。

(6)

39年8月の独ソ不可侵条約の締結と、それにひきつづく英仏の対独宣戦は、共産党にたいするフランス政府のたいどを変こうさせた。フランス政府はフランス共産党を解散し、さらにこの国の亡命中の政治移民を追及することになる。それは、亡命先パリを指導の拠点とするイタリア共産党の組織的な困難においいうちをかける。

「イタリアの共産主義運動の過去の推移を再考すると、1923年、29年、35年と極端に困難な時点をいくつもみいだすことができる。しかし、移民のあいだにあるトップとイタリアの下部との接しよく、国の内部におけるさまざまな組しきの

イタリアの労資関係と諸政党についての覚えがき (3)

あいだの接しよくが、1939年から41年という第Ⅱ次世界大戦のさいしょの局面におけるように偶然的で、はかなかったことはない。」⁽²⁵⁾

8月末、スタート・オペライオ、ラ・ヴォーチェ・デッリ・イタリアーニなどが抑圧され、8月31日から9月1日にかけてトリアッティ（8月11日に共産党の再組しき化のためバリーにきていた）とロンゴが逮捕される。そのごもジュリアーノ・パイエッタ、マリオ・モンタニャーナ、プラトーネ、ビボロッチィ、パロディ、テレザ・ノーチェ、レオ・ヴァリアーニ、その他数おおくの指導者が逮捕され、ヴェルネーのキャンプには4,000人の外国人共産党員があつめられたという。追及をのがれるために、G.ベルティがアメリカ合衆国に出発すること、ひきつづきディ・ヴィットリオがベルティにつづくこと（ただし1年ごとにフランスで逮捕される）、グリエーコとネガルヴィッレがソ連に出発すること、などの組織上の措置が決定された。

ロンゴはフランス内の集中キャンプをいくつかまわされたあと、42年2月イタリアのファシスト当局にひきわたされたが、トリアッティは40年2月釈放された⁽²⁶⁾。トリアッティは中心幹部が拡散することを批判、党の組織体制のたてなおしをはかって、3月、ノヴェッラ、ロアジーオ、マッソーラ、補助メンバー・ネガルヴィッレの構成する国外事務局 (ufficio estero) を設置した⁽²⁷⁾。38年の旧イデオロギー・センターのメンバー、ベルティ、グリエーコ、ディ・ヴィットリオ、ロアジーオのうち、このあたらしい指導機関にはいっているのはロアジーオのみである。トリアッティは、38～39年の国外センターをまきこんだ争いに深まりしなかったものを重視したようである。

ベルティは39年末アメリカに出発したが、ディ・ヴィットリオは1年ごとにフランスで逮捕された。ベルティがアメリカにわたったことについては、評価がややわかれるところである。スプリアーノの《イタリア共産党史》は、

「トリアッティは、中心幹部の拡さん、ベルティのアメリカ合衆国への出発、責任ある幹部たちのあいだにみられる日和見主義のあらわれを批判した」⁽²⁸⁾と書いているが、ボッカの《パルミーロ・トリアッティ》は

イタリアの労資関係と諸政党についての覚えがき (3)

「ベルティは、指導部の会合で、ブリュッセルでコードヴィッラにあったときに命令をうけ、そのご《名前をいうことができない高級幹部から》命令をうけた、と表明したあと、急にアメリカ合衆国へむけて出発した。指導部の同志たちは承認するいがいになかった。……名をいえない高級幹部はだれなのか？ のちにベルティはそれをのべる……《いまではそれをいうことができる。私に出発することをみとめたのは、妻のバルディーナ・ディ・ヴィットリオも確認することができるように、トリアッティであった。》……他のものは、彼が逃亡したのだと非難する」⁽²⁹⁾

と書いている。この出発がトリアッティと了解のうえであることは、アメンドラの《イタリア共産党史》もみとめている。ただしアメンドラは、第二次世界大戦がはじまり、主要幹部が逮捕されたあとにこの了解を実行したことを誤りとしているのである。

「トリアッティの逮捕は、ロアジーオの記憶によると9月1日にひらかれた会合に、どの同志が参加したかは、議事録がないので正確なことがわからない。ベルティ、ディ・ヴィットリオ、グリエーコ、ロアジーオ、ノヴェッラ、マッソーラはたしかだが、おそらくネガルヴィッレも参加した。何人かの同志の安全を保障するため、ベルティをアメリカ合衆国に出発させ、ディ・ヴィットリオも同地にむかわせて、そこでイタリア共産党の機関誌としてのスタート・オペライオを刊行するという提案がうけいれられた。この決定は、実際は数日前に、トリアッティとの話しあいのなかで決定されていたのである。誤りは、戦争が勃発し、トリアッティとロンゴが逮捕されたあとにも決定がそのまま維持されたことである」⁽³⁰⁾

このあとトリアッティはベルギーをへてソ連に到着、党の書記局を再開して同年夏さらにつきのような処置をとった。中央委員会およびその他の指導機関を解散し、トリアッティの指導のもとにマルティニ、ピアンコで《イデオロギー・センター》を設置する、そのもとに指導先端点をおき、先端点の責任をうけもつものは指導部の代表者とする。国内指導部の核をおくためにマッソーラを潜入さ

イタリアの労資関係と諸政党についての覚えがき (3)

せ(6月7日、ルピアーナへむけて出発)、マッソーラの欠けた国外事務局にネガルヴィッレを補充し、フランスから国内の指導作業をおしすすめる任務を付よする、モスクワから1人の指導者(アモレッティ)をアメリカ合衆国にはけんしてベルティ、ドニーニとともに党のセンターを形成する、《スタート・オペライオ》を新大陸におけるイタリア移民のための雑誌とし、アメリカ共産党がモスクワにあるセンターがその政治的コントロールをおこなう、ことなどがそれである。トリアッティとともに《イデオロギー・センター》を構成するマルティーニ、ピアンコはいずれも政治指導者というよりも老れんな事務局員タイプの党员であり、1927年いらいトリアッティと相協力して党の指導にあたってきたグリエーコはこの《センター》からはずされていることが注目される。なおアモレッティをアメリカに派遣したことについて、スプリアーノは「アメリカ合衆国で、ベルティとドニーニとともに党のセンターを形成させるために、モスクワからアメリカへ1人の指導者を派けんすることがきめられた(アモレッティがこの任務を託された)。」⁽³¹⁾ とだけのべているが、ボッカは、ベルティの責任が追及されたとしている。

「トリアッティは、アモレッティにたいし、ニュー・ヨークへおもむき、ベルティをすべての指導的任務からはずすように命令した。しかしアモレッティは日本をへてアメリカへむかう長い旅の途中死去したので任務を完うすることができなかった。事態がどのようにすすんでいたのかを正確にいうことはむずかしい。ベルティを指導部からはずすことは、3人の会合でたしかにきまった。『同志ベルティを移民にひきわたすこと。彼が携帯していった金をひきわたさせること。』しかしアモレッティの死によったのか、モンタニャーナ、ドニーニなどといった人がドラスティックな措置を思いとどまらせたアメリカにおける共産党移民の状況によったのか、または、まだしられていない他の事実が関与したのか、たしかにベルティはスタート・オペライオの指導をつづけた。そして44年末イタリアへ帰ったとき、彼はしごとについて調査委員会にこたえねばならず、全般的に恩赦をうけたなかで彼のみが埋め合わせを要求されることになるのである。」⁽³²⁾

イタリアの労資関係と諸政党についての覚えがき (3)

フランスにおいては、セレーニ、ドッザ、パニョラーティらは当局の追及をまぬがれ、ドイツ軍非占領地帯に脱出する。またドイツ軍占領地帯で機能している国外事務局（ロアジーオ、ノヴェッラ、ネガルヴィッレが構成）は3,000部ほどの《ラ・パローラ・デッリ・イタリアーニ》を発刊し、イタリア国内と結びつく任務をすすめようと努力していた。そしてアメンドラはイタリアの参戦前夜に南フランスに到着、マルセイユでS. スキアッパレリにであい、中一南部フランスにいたセレーニ、ドッザ、I. ニコレットらと結びつきをつよめた。このころ、南フランスの収容キャンプからイタリア共産党員グループが脱走し、それぞれ活動の配置につく。ほぼ全員がスペインにおけるガリバルディ旅団の戦闘員であったこれらの人物が織りなす運動網は、フランスのレジスタンスにも貢献し、イタリアへの潜入の重要な基地ともなる。この間、党の国外事務局は40年の秋にマルセイユのセンターと連絡を回復し、41年夏から42年夏にかけてスキアッパレリ、アメンドラの助力ですべての非合法機関とともに、フランス南部、マルセイユにうつされる。国外事務局は、独ソ戦開始ご、南フランスにおいて社会党、正義と自由と接しよく、41年10月セレーニとドッザ（共産党）、ネンニとサラガット（社会党）、トレンティンとファウスト・ニッティ（正義と自由）の署名するイタリア人民むけアピールを発表する。

どのような困難な状況にあっても、イタリア国内との結びつきをつよめ、国内センターを再建することはつねにイタリア共産党の第一の課題であった。39年には、リグリアとミラノにふたつの基地をおき、チュフォーリ、マッシーニ、マッソーラがそこで任務につくという計画がたてられた。G. トンベッティがこの道をひらくために派遣され、リグリアに到着した。しかしトンベッティは警察の手におちて屈服、これによってリグリアにおける党組織は大きな痛手をうけた。マッソーラもミラノに到着したが、ここにとどまることが不可能とみてフランスに立ちかえる。そして40年6月7日にもマッソーラはイタリアへの潜入をめざしてルビアーナへ出発する。このマッソーラに合流すべくマルティーニも同年10月ユーゴスラヴィアのザグレヴにおもむく。マルティーニはそこでマッソーラにであ

イタリアの労資関係と諸政党についての覚えがき (3)

ったが、のちに逮捕される。41年7月釈放されてマッソーラに合流すべく行動をおこしたが、セルビア・クロアチア国境でさいど逮はされてイタリアのカラビニエーレにひきわたされた。特別法廷は14年の刑に付したが、1年を経過せぬ42年6月22日チヴィタベッキア監獄の病室で死亡する。マッソーラのほうは41年8月1日イタリアに潜入することに成功して、しごとを開始する。おなじ月のうちに《勤労者ノート》第1号を刊行し、党の文書、アピール、モスクワ放送、ロンド放送からのニュースをつたえた。ここにあたらしい《国内センター》のいしづえがおかれたのである。マッソーラは、さまざまな地方で息をひそめるようにして生きのびてきた旧い党員をむすびつけ、徐々に宣伝・活動の網をつくりあげていく。この年の秋にはミラノで《スパルタクスの手紙》、《グリード・デル・ポポロ》を準備するが、配布はなおきわめて困らんである。

この時期ムッソリーニはイタリア人移民にたいして故国へかえるようにすすめ、いくつかの促進そちをとった。さいしょはこれに応ずるものの数もさほど多くなかったが、41～42年にフランスでの生活条件がきびしくなるとともに帰国者の数もふえる。当初は帰国者にたいする国境でのチェックもきびしかったが、それもしだいにゆるやかになる。それはイタリア共産党の組織活動にとっては好機であり、新しい《合法者》がイタリアへ情報をおくることがようになった。

イタリア共産党の秘密組織は、労働者の生活をきそにして「労働組合煽動委員会」をひろげるようにつとめ、またトリノ、ピエッラ、ミラノ、エミリアなど各地で生きのびてきた工場細胞も活動を再開するゆとりをわずかずつ回ふくする。たとえばサヴォーナのある工場におけるファシスト労働組合の会合では一労働者が公然と共産党員であることをなのって、ファシスト労組の会合に参加しないよううったえたという。マッソーラは印刷機をミラノに設置し、42年7月にウニターの復刊第1号を発行した。第1号が600部を刷ったのにたいし、8月の第2号は1,200部、12月号は4,000部を刷っており、まわしよみをかながえれば12月には6万から8万人が目をとおしているとマッソーラは推定している。43年の1月からウニターを15日刊とする。こうして共産党の組織網は濃密なものへ回復してい

イタリアの労資関係と諸政党についての覚えがき (3)

き、この党のエンジンはフル作動をはじめようとしていた。労働者のあいだでも共産党の小グループがそれぞれの連絡なしに活動を再開していたが、トリノのFIAT、ミラノのカプローニ、ピレリ、アルファ・ロメオのグループが国内センターと接しょくをとって、その指導をうけるようになる。

ただしこのマッソーラと、南フランスにうつった国外事務局を中心とする指導者のあいだには組織問題について意見の不一致があったようである。国外事務局はマッソーラがイタリア潜入に成功したことを41年の後半にしり、マッソーラもまた国外事務局がおこなっている活動を認識した。しかし「国外事務局とフランチェスコとの関係は予想されたよりも困難であることが明らかになった」とアモンドラはかいている⁽³³⁾。両者のあいだに手紙の交換がなされるのは42年の9月になってからのことであるが、ふたつの機関の政治的・組織的指導を統一する基準をさだめようという国外事務局の提あをマッソーラは拒否した。マッソーラにすれば、国内センターを再建せよというトリアッティの指示にしたがひ、最だいの危険をこえて再建した国内センターはトリアッティの指導をうけるだけで、南仏におかれていた国外事務局の助言・指導をうける必要がない、という自負があったであろう。ボッカによれば、「マッソーラは、情報をおくり、命令をうけるのが彼いがいのだれでもないことをトリアッティに確認するよう要求、トリアッティはマッソーラを満足させた⁽³⁴⁾」という。マッソーラは、基準の設定などよりも、ロアジーオとノヴェッラこそイタリアへはやく潜入すべきだと要求した。しかも国外事務局と国内の党員が直せつ接しょくしていることもマッソーラのいらだちをつとめたようである。

南フランスにあったイタリア共産党員も42年の秋には、すぐれたアルピニストでも党員のD.トマート、G.アルビーニの先導でクラピエ山経由の道をひらくことに成功する。ロクビッレールを出発して2,000mにまでたっし、アンジェロ湖の岸を、とくに監視のつよいコッロ・ディ・テンダをまくようにしてクラピエ山の山頂にまでのぼる。ついでアントラク谷にいたってサンタンナ・ディ・ヴァルディエーリを右にしつつ山頂に達し、そこからまっすぐヴェルナンテにおりる

イタリアの労資関係と諸政党についての覚えがき (3)

この道をとって国外事務局のメンバーがつぎつぎとイタリアに潜入する。43年1～2月のあいだにロアジーオ、ネガルヴィッレがフランスからミラノに到着、さらにノヴェッラとアメンドラも4月20日ごろミラノに到着し、他方、ロヴェーダも流刑地から自由な活動にはいりイタリア国内の指導部を再編成することが急務となった。だがマッソーラと、国外事務局メンバーとのあいだの関係の確立は、容易なことではなかった。マッソーラは、イタリア国内における自己の指導上の責任をつよく主張した。この点についてアメンドラはつぎのようにのべている。

「フランチェスコの慎重さは、このこの目的の達成に必要ないっさいのイニシアティブを展開することをみとめなかった。フランチェスコはきわめてきびしい警戒の方法をもって1年半以上にわたり自己の非合法活動をまもることに、したがってまた国内センターの生命をたもつことに成功してきた。いっさいの軽ささ、冒険はきびしく拒絶された。……マッソーラは、トリアッティとコミンテルンにたいしてもっぱら彼が国内センターの指導機能の責任をもっていることをきわめてがんこによごした。国外センターとのあいだの何ヵ月にもわたる沈黙、1942年9月に国外センターから彼に送付されたさいしょの書簡を彼にとどけた伝言者になされた口頭での回答の内容、クロッキアッティとのあいだで急速に爆はつした対立、これらすべてのことは、マッソーラがひきつづき最大限の注意ぶかさで行動する意図を、とくに国内センターを指導するようにトリアッティから彼に委任された責任を完全な特別権利として保持しておく意図を、示している。」⁽³⁵⁾

アメンドラはマッソーラの活動に積極的な評価をあたえているが、どうじに、国外事務局がイタリアへ到着したことは指導体制に質的な変化をもたらすものであり、マッソーラ、フランスにのこっていたもの、流刑地からやってきたもの、ヴェントテーネにいるものたちの経験を統合することが必要だと、考えていた。マッソーラはこれに抵抗してトリノにとどまったままであった。アメンドラはネガルヴィッレの合意をえて、《統一指導部》の形成を促進するためトリノにおもむいたが、マッソーラの抵抗はなおつよく、国内合同センターがマッソーラ、ロアジーオ、ロヴェーダ、ノヴェッラで構成さるべきこと、共謀という理由でネガル

イタリアの労資関係と諸政党についての覚えがき (3)

ヴィッレとアメンドラをのぞくよう提案した。ロアジーオとノヴェッラはこの2人も参加するよう主張、結局、〈暫定的に〉、2人は全体会合には出席せず、討議された問題をノヴェッラと討議することが決定された。

(7)

ファシズム体制に陰がしのびよってくるのは40年10月のギリシア侵攻に失敗してバドリオが参謀総長を辞任したところからである。この年の冬季にはアルバニアとキレナイカでも敗北をきし、ジェノヴァをふくむ海岸地帯にはすでにイギリス軍の飛行機が襲来するようになる。そしてイタリア国民が愛国主義の幻想からさめ、戦争をきらう感情をつよめるのは41年になってからのことであって、国民の不満はまず家屋や工場の壁への落書きというファシズムにたいする自然発生的な抵抗のかたちをとる。42年の秋から冬にかけてトリノ、ミラノ、ジェノヴァ、サヴォーナ、カッリアーリへの空襲がはじまり、生活はさらに悪化、国民の不信感と不満が増大する。工場内でもすでに空気の変化が生じており、42年の3月にはトリノの工場で32人の見習工が賃金支払についての不満からストライキが発生、アスティ、ミラノ、ピエッラにも同様のうごきが生じてきた。43年にはいるとファシスト労組をみかぎる空気はいちだんとつよくなり、共産党は、行動しなければならぬとえられないことをくりかえし宣伝しつづける。2月後半になるとマッソーラ、クロッキアッティは工場内の指導者、とくにL.ランフランコとFIATにおけるストライキについて数多くの討論をおこなう。ひとつの問題は、ストライキを宣言して仕事を放きするか、宣言せずに仕事を放きするのか、であり、もうひとつの問題は、ストライキにさいして労働者は工場内にとどまるか、工場の外へでてしまうのか、という問題である。マッソーラたちはストライキを宣言すること、また、まだ動ようしている労働者をひき入れるためにストにさいして工場内にとどまるという方針をきめ、192時間ぶんの手当を全労働者に支払えという要求を中心にして、3月5日、10時からFIATのミラフィオーリ工場ですトライキをおこなうことをきめた。

イタリアの労資関係と諸政党についての覚えがき (3)

3月5日、10時、ミラフィオーリ工場第19作業場は仕事をやめ、工場内の行進にはいり、他の部門もこれにつづいた。ストライキはこの日のうちに他の工場へも波及し、共産党の活動家は7,000枚のピラをまく。ストライキは9日、10日、11日とさらにひろがり、警察のたいほにもかかわらず15日にもさらに拡大する。FIATの経営者は18日に「労働規律が遵守された部門の全労働者には300リラの前払いをおこなう」と声明したが、これにたいしてFIAT全部門の労働者が抗議の行動にはいった。

ミラノの共産党員は3月20日、工場と労働者街でピラをまく。党員の数はトリノより少なかったが、労働者とのむすびつきはみっせつにとっており、23日にストライキをおこすことを決定した。ミラノではこの日から29日まで多くの労働者をまきこんでストライキが展開される。ストライキは3月末にピエツラ、その他にもひろがり、3月14日にはポルト・マルゲーラでもおこなわれる。

ストライキにおいてイタリア共産党がはたした指導的役割は承認してもよさそうである。そしてこのストライキは、イタリアにおける闘いにとって決定的意味をもつとともに、イタリア共産党を決定的にかえるものであった。ファシストの苛酷な抑圧体制のもとで、ながいあいだ地下活動のなかにあった各レベルの幹部に、このストは、大衆のなかで大たんないニシアティブをとることを経験させたのである。

注

- (1) 河野穰「イタリアの労資関係と諸政党についての覚えがき I」中央学院大学論叢
- (2) Lepre—Levero, *La formazione del partito comunista d'Italia, Riuniti*, p. 330.
- (3) 書記長 (Segretario generale) という名称が大会で採用されるのは 1926年のリヨン大会においてである。
- (4) P. Spriano, *Storia del PCI, I*, p. 131 Einaudi.
- (5) *Ibid.*, p. 151.
- (6) *Ibid.*, p. 131.
- (7) G. フィオーリ「グラムシの生涯」藤沢道郎訳, 平凡社 p. 181.
- (8) 河野穰, 前掲(1)におなじ
- (9) 「イタリアにおける共産党は、政党として容認され、承認されており、また、社会党

イタリアの労資関係と諸政党についての覚えがき (3)

のリヴォルノ大会で生じた分裂後も、その政治的代表をとおして国会において政党として確認されている。わが国の自由主義的法律が破壊的だという理由で犯罪という項目にあげていない上述の党に属する者が、彼らの信念への誓いということだけで、または、そこでになっている任務の故に、社会的違法行為の典型的かつ特徴的な形式である反乱煽動結社を構成しているとはいえないのである。」

P. Spriano, *Storia del PCI*, I, p. 321.

(10) Camilla Ravera, *Diario di trent'anni*, Riuniti, pp. 247~248.

(11) Berti の証言は P. Secchia の *L'Azione svolta dal partito comunista in Italia durante il fascismo 1926~1932* に引用されている。「タスカは、他のファシズム政党（たとえば社会党）が選択した路線、つまり公式の組しきを解散、カモフラージュをして、政治活動を放棄せずに、しかしタスカによれば、明確になっている新しい現実を考りよに置いて過去のそれとは異なった形態で展開することによって、地方幹部を抑圧から救おうとした路線はわれわれにとっても妥当なものでありうることを考慮すべきだという見解であった。1926年11月のさいしょの10日間に、ミラノで逮ほをまぬかれた党の若干の指導者のあいだでもたれた会合で、タスカはこの見解を表明した。この会合は中央委員会の真の、かつ固有の会合であったということではできない。このとき中央委員会の逮ほをまぬがれた少数のメンバーがミラノで会合し（逮ほされなかったすべての者ではない。なぜならすべての者を召集することはできなかつたらうし、全体の会合は危険でもあった）、社会党が決定したのとおなじように共産党を形式的に解散する決議を、グリエーコの同意をえてタスカが提出し、承認された。……しかしながらグリエーコは、この文書に同意したあとで、躊躇いとためらいを感じ、承認された文書の内容を決定がなされた会合に参加しなかったカミッラ・ラヴェーラにつたえた。ラヴェーラは確固とした反対を表明、この会合はその召集方式からして正規の会合とみなすことはできないとつたえ、グリエーコに彼のとった態度を白紙にもどすように説得した。こうしてタスカは彼の見解をつらぬくことに成功しなかった。……文書は回収・破棄され、正規の中央委員会が召集されて（この会議にはイタリアにあってまだ逮ほされていない中央委員会の全メンバーが召集された）、先の文書とおよそ反対のことがのべられている他の決議が確認された。この決議は、党はその位置にとどまること、すべての地方組しきに、この時点いこうとくに必要になる地下活動の方法を確保することによって、自己の活動を継ぞくするようよびかけている。（同書 p.17）、Camilla Ravera の証言は、前掲(10)、pp. 254~255.

(12) *Unità* は24年にミラノで創刊されている。

(13) 同名の雑誌は、23年8月にも創刊されたが、検閲のため継続できなかった。

(14) 28年6月の中央委員会におけるセッキアの発言、P. Spriano, 前掲(4), II, p. 90

イタリアの労資関係と諸政党についての覚えがき (3)

より再引用。

- (15) G. Galli, *Storia del PCI*, p. 134.
- (16) *Ibid.*, p. 140.
- (17) ボルディガ派の B. Fortichiari も 1928 年に除名されている。Fortichiari は、1924年にコミンテルンから執行委員に指名されたが、ボルディガのすすめにしたがって辞任している。除名の経過は把握できていないが、1945年に復党している。
- (18) G. Amendola, *Storia del PCI*, p. 187.
- (19) *Ibid.*, pp. 188, 197, 198.
- (20) ただし、サンティアー、ドッザは31年4月の第Ⅳ回ケルン大会で政治局に、チュフォーリーは中央委員会には入っている。
- (21) G. Galli, 前掲 (15), p. 161.
- (22) G. Amendola, 前掲 (18), p. 201.
- (23) *Ibid.*, p. 205.
- (24) P. Spriano, *Storia del PCI*, III, p. 132.
- (25) *Ibid.*, IV, p. 16.
- (26) トリアッティが釈放された理由については、身分をかくすことに成功したためだという説明と、ディミトロフの指示による「捕虜」の交換の結果だとする説明がある。G. Bocca の《Palmiro Togliatti》が、トリアッティの釈放をディミトロフの指示による捕虜の交換によるものとしていることはすでに、「イタリアの労資関係と諸政党についての覚書きⅡ」でのべたとおりである。G. Bocca, *Palmiro Togliatti*, P. 338. Laterza, 1973.
- (27) 国外事務局のこの構成はスプリアーノによるが、G. ガッリの《イタリア共産党史》では、これを《臨時指導センター》とよび構成員も、ディ・ヴィットリオ、セレーニ、ドッザ、ノヴェッラ、マッソーラ、ネガルヴィッレとし、さらにアメンドラがくわり、ロアジーオ、スコッティ、バロンティーニが協働した、としている。G. Galli, *Storia del Partito Comunista Italiano*, p. 209, Formichiere, 1976.
- (28) P. Spriano, *Storia del PCI*, III, p. 330.
- (29) G. Bocca, *Palmiro Togliatti*, p. 340.
- (30) G. Amendola, *Storia del PCI*, p. 407.
- (31) P. Spriano, *Storia del PCI*, IV pp. 22~23.
- (32) G. Bocca, *Palmiro Togliatti*, p. 344.
- (33) G. Amendola, *Lettere a Milano* p. 47.
- (34) G. Bocca, *Palmiro Togliatti*, p. 350.
- (35) G. Amendola, . . . (33), pp. 86~87.